出エジプト記 3 章 13-22 節
「わたしはある」

「私はある、私はあるという者だ」とは、不思議な言葉です。神がこの言葉をモーセに語られたということは、神が彼を特別に選び、自分の計画を進めるために用いようとされたからです。したがって聖書は、モーセについて、誕生からその生涯を紹介しているわけです。彼がヘブライ人の子として誕生し、エジプトの王女に拾われ、王女に引き取られ、王子として成長しました。しかしヘブライ人としての感情に動かされて、エジプト人を殺害し、追われる身となった彼は、異国の地で羊飼いとなり、家庭を持ち、平和な生活を送っていましたが、年月は過ぎ、今や老人となっていました。

1節に「モーセは、…神の山ホレブに来た」とあります。平和な生活を送っていたけれど、どこか心に穴が開いている。そんな彼だからこそ、神は彼を用いたのでしょう。神は不思議な現象、燃え尽きない芝を見せることで、モーセとかかわります。そして「私はアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」と語ります。神は一方的に、今エジプトで奴隷身分とされたイスラエルの民が虐待され、苦しみ叫んでいると告げ、その彼らを解放するためにエジプトに行き、カナンの地に導き出すようにモーセに命じました。これを聞いて、驚きまた恐れた彼は、強く拒みました。「私は何者でしょう。どうして、ファラオのもとに行き、しかもイスラエルの人々をエジプトから導き出さねばならないのですか。」

すると 12 節のように神は言いました。「私は必ずあなたと共にいる」と。原文は「私はある、必ずあなたと共に」です。そして改めて神がその名を語ります。「私はある。私はあるという者だ」と。この「ある」はヘブライ語で「～になる、生じる」、「存在し続ける、生き続ける」と訳せる言葉です。そして今、天地万物の創造主である永遠の神ご自身が、モーセに「私はハヤー」と告げているのです。これを聞いたとき、モーセは圧倒されました。人生の終わりを考え、虚しさと孤独の中にあった彼にとって、「私はある」という言葉は、「あなたは生きよ」と聞こえたと思うのです。つまり、神が造られたすべてのものに向かって、「生きよ」と語りかけている言葉であることを知ったのです。そして同時に、聖書は最初から最後まで一貫して「希望に向かって生きよ」と、神からのメッセージが刻まれていると思うのです。

神はモーセにご自分の名を告げたのですが、名前だけでなく、神ご自身が私たちと同じ人間となってご自分を現されました。その方こそ主イエス・キリストです。彼は天地の創造主である神と1つであることを示すために、何度も「私はある」と語りました。新約聖書はこの言葉を「エゴー・エイミー」と記しています。エゴーは「私」、エイミーは「ある」で、エゴー・エイミーは「私はある」です。「私はある、私はあるという者だ」とは、まさに「生きよ！」という、神の私たちに対する戒めです。天地創造の神は私たちに「生きよ」と言われます。これまでの人生がどうであれ、過去を一切問わない、常に前に向かって「希望に生きよ！」と命じておられます。そのために神は、いわばはっきりとこのことの裏付けとして、イエス・キリストを十字架の死から甦えらせられました。

神から召命を受けて40年経ったモーセは、約束の地に入ることはできませんでした。しかしピスガの山の頂上に立って、「自分のふるさとはあそこだ」と思って天を仰ぎ見ました。私たちも今、ピスガの頂きで天を仰ぐモーセには及びませんが、しかし「生きよ！」という言葉は、天国にまで続いている言葉なのです。つまり「生きよ！」という言葉は、今の私たちにも聞こえてくる力強い言葉である。そのことを、感謝して受けとめたいと思います。